



細み物の「かぎ針」のような器具で静脈瘤を引き抜く

やすくなり、ひどくなると血行障害から皮膚炎が起こってきます。詳しいメカニズムは分かっていますが、疲労やこむら返りは、血液中の老廃物が溜まったままになるために生じると考えられています。

こう話すのは、お茶の水血管外科クリニック院長の広川雅之医師だ。同院は日本で最も下肢静脈瘤の患者数が多く、予防や最先端治療に力を注ぐ。

広川医師によると、下肢静脈瘤は、もともと病気になるやすい体質に、生活環境が加わったときに起こりやすく、悪化しやすい。妊娠も一つのリスクだという。「生活環境のなかでも」と

**レーザー治療の登場で日帰り治療が可能に**

一方、治療を受けるタイミングについて、広川医師は「見た目」「症状」「皮膚の炎症」の3点を挙げる。

くに注意しなければならぬのは仕事です。理容師、美容師、調理師など、長時間、立ちっぱなしの仕事をしている人たちに多く見られます」（広川医師）

脚は心臓より下にあるため、立ちっぱなししていると重力で足に血液が溜まっていき、柔らかい静脈を押し広げていく。この状態が日常的に続くことで、静脈が徐々に伸びて元に戻らなくなり、弁も広がってゆるんでくる。残念ながら、一度伸びた血管や壊れた弁は元には戻らない。

「したがって、まずは予防が大事です。まずは定期的な脚を動かすこと。同じ立ち仕事でも、歩くことが多い人のほうが下肢静脈瘤になりやすいです。あとは休憩を入れることですね。市販の弾性ストッキングをはくのもお勧めです」（広川医師）

特に皮膚炎については、下肢静脈瘤が皮膚の症状を起こすことを知らない医師もいる。もし、長年、塗り薬を使っても治らないような皮膚炎があったら、一度、血管外科で診てもらった方がよいかもしれない。下肢静脈瘤の検査は、超音波で確かめるのが一般的だ。脚にゼリー状の液体を塗ってプローブという器械を当てただけなので、痛みもななく簡単にできる検査だ。

治療は、これまでは皮膚を小さく切開して原因となる静脈を引き抜く「ストリッピング手術」が行われてきたが、最近になってレーザーを用いる「血管内レーザー治療」が健康保険の適用となった。血管のコブだけは小さく切開して引き抜かなければならないが、レーザー治療と組み合わせることで、患者への負担は大きく減ったという。

「レーザー治療では、血管内にレーザーを入れて、静脈の先端まで到達させた後、徐々に引き抜きながら照射していきます。これで血管がつぶれ、血液が流れ込まなくなり、血管が一本

失われるわけですが、この部分の静脈（大伏在静脈、小伏在静脈）がなくなっても、特に問題が起こることはありません」（広川医師）

興味深いことに、血管をつぶすというレーザー治療の考え方は、古代ローマ時代からあったとのこと。「まっすぐな血管は焼け火箸を突っ込んで焼け」という記録があるという。

この治療の最大のメリットは、治療時間が40分と短く、忙しい人でも日帰りで行う治療できることだ。ストリッピング手術は入院で行うことが多いため、多忙で仕事が終わらぬまま、治療をあきらめていた人も、日帰りで行えるレーザー治療の登場で、治療を受けに来るようになったと、広川医師は言う。

こうした簡便で患者に負担がかからない治療が普及した一方で、懸念される状況も生まれつつある。過度な治療を試みる医療機関が出てきているのだ。

こんな例がある。30代の女性がむくみで悩み、ある血管外科を受診したところ、下肢静脈瘤があると指摘。すぐに治療をした方がいいと言われた。女性はセカンドオペニオンで広川医師のもとを尋ね、検査を受けたところ、「下肢静脈瘤は軽度でレーザー治療をするほどではなく、むくみは別の理由で起こっている」ことが分かった。セカンドオペニオンをとらなければ、先の医療機関で必要のない治療を受けていた可能性があるという。

近年、入院施設のない美容外科や整形外科のクリニックでは、高額な日帰り手術が盛況のようだが、その決定には他の医師の意見を聞くなど、より慎重でありたい。これが現場取材したものとしての正直な感想だ。



「気になる人はまずは検査を」と広川医師



レーザー治療の様子。この治療が可能になった背景には、麻酔の量も大きい、強い震動の麻酔を広い範囲で使っても麻酔の効果が変わらないことが分かったため、今は痛みがほとんどないその方法で治療をしている

医療ジャーナリスト  
**伊藤 隼也**が行く  
ニッポンの医療現場 第35回

立ち仕事の人には要注意  
**脚にできる血管の“コブ”  
「下肢静脈瘤」を治す・防ぐ!**

脚にできるコブのような血管の膨らみ。気になったまま放っておいている人もいないだろうか。今回は、脚の痛みや皮膚炎が起こることもあるという、この「下肢静脈瘤」の最先端治療や予防法を取材した。

**30代・40代の女性や男性にも起こる病気**

夕方になると脚がむくむ、だるくて重い、明け方にこむら返りが起こる、何となく皮膚がかゆい……。意外と知られていないが、こうしたありふれた症状や悩みの原因の一つになっているのが、脚の血管の病気、下肢静脈瘤だ。コブのような膨らみが出ることから、とくに女性には「見た目の問題」としても気になるころだが、実は、意外とやっかいな病気だ。

そもそも、静脈というのは、ご存じの通り、古くなった血液を心臓に戻す役目を持つ血管だ。血液が逆流しないよう、ハハの字形の弁が付いている。下肢静脈瘤になると、この弁が何らかの理由で壊れて血液が心臓に戻りにくくなり、脚（下肢）に血液が溜まってコブのように膨らんでくる。年配の女性に多い印象があるが、患者数は推定で1000万人以上。30、40代の女性や男性にもみられる。「下肢に溜まった血液から体液が漏れるため、むくみ

いとうしゅんや ●医療ジャーナリスト・写真家 国内外問わずさまざまな医療現場を積極的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多数のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。 <http://shunya-ito.tv>